

特 59

925

反及十書傳



No 9431

信州村上左工門  
尋義清家臣相木  
森之於時世ヲ察  
山中ニ閑居ス其  
平遠鹿之ヲ助  
山中鹿之助号

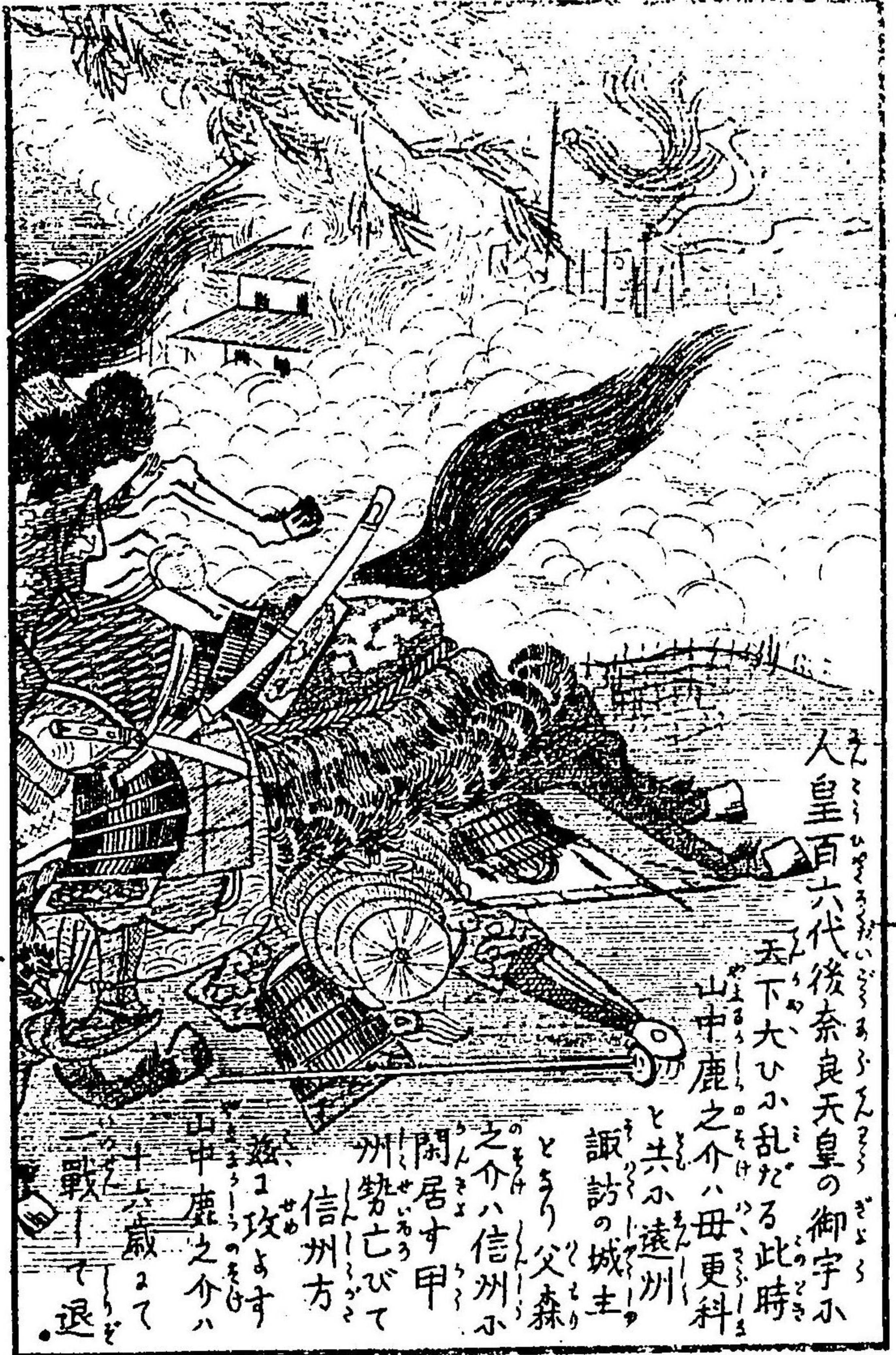


尼子



鹿の介ハ天下ノ名を顕さんと母と別れ  
 開きて信州相木が隠家に至る  
 以上方よりてぞいさりたる

尾子  
 二



人皇百六代後奈良天皇の御宇小  
 天下大い小乱たる此時  
 山中鹿之介ハ母更科  
 と共小遠州  
 諏訪の城主  
 とより父森  
 之介ハ信州小  
 閑居す甲  
 州勢亡びて  
 信州方  
 茲に攻めす  
 山中鹿之介ハ  
 十六歳にて  
 戦いで退



大谷古猪之介

尾子

三

主従の  
約を  
童子  
山中  
鹿  
之介  
を  
討殺し  
ければ  
是より  
大谷古猪之介の号  
しその怪力を賞  
て老母の手當の金  
を子へて後を約し  
再會を期して此の  
処を出でまじり



叔も鹿之介ハ笠ふく  
り山道を東海道掛川  
より秋葉の山中より  
宿を求め廿一  
一村に十六ばかりの  
童子を人々焚殺  
さんとは是が  
救ひを乞われバ  
鹿之介ハ  
金を出し  
助けたる  
親子  
共悦  
家で  
帰り



寺一名を早川  
 船之介と始め  
 後教多山中  
 恩を報ひ尼子  
 の十勇士の一人  
 英名を顯

早川船之介

尼子 四



て又と  
 元の板  
 を以て  
 船を  
 漢す  
 鹿之介  
 之を見て  
 大なる  
 とその  
 漢方を  
 見て是よ  
 り武士と  
 らんとそ  
 勸め金を

茲に芥川の傍は漢夫  
 ありて元吉田某と  
 云ふて武士の一子  
 浪士となりて父の世  
 を去り獨り世す  
 上川より大なる  
 板を以て河に  
 逆下りたる氷流  
 溢れて地上に  
 小船をび出  
 せしを  
 見之を  
 勸め



山中鹿之介ハ京都小ざりて所々見物するも  
 三條通りは菊酒屋と云ふ酒屋に未だりて此店の  
 主人が菊立出て大ひよろこびて且母上  
 更料をま小恩あることを云て  
 鹿之介もいふめをりある日鹿之  
 介ハ清水寺まで詣て  
 中納言宗教卿の姫君を  
 見始めたり英士も茲に病  
 ありお菊は色々  
 事あるハ人と返事あり  
 しくハ鹿之介も今ハ  
 是までよりソテ  
 姫ハ清水寺一



詣てあふす  
 見たまほ  
 五條川原  
 未だりて頃父陽と  
 悪徒津村軍三手下を伏して姫  
 帰館を待ち奪ひて南をさして  
 去りければ鹿之介見たり姫を  
 のいで中納言を送り及れば  
 御大に悦びひひて姫をのふ  
 後ち山中の妻とすりあふ  
 九重姫是より鹿の介ハ  
 播州尼子を助さんと  
 いそぎ上月の城に  
 あつひきらる

播州及び雲州の城主尼子  
 義久公ハ中納言の姫八重姫と  
 娶りのひて毛利山名等  
 とあぶく戦争  
 止むとささく  
 おりうり  
 山中鹿之介ハ  
 八重姫の妹婿と  
 ありて上月の城  
 を守り義久公ハ  
 富田の城を  
 守りかへ  
 茲に奇異なる事ありて  
 こゝ元は葉赤と云ふ者あり



尼子 六

ちるの毎夜十  
 わりの美少年あり  
 束雲のころ帰らる  
 その姿いよいよ  
 何やとぞれバ  
 鹿之介命を  
 て之れを見  
 頭へけれバ  
 大いなるうはうその  
 怪物あり  
 ちり





義久の一族小尾子九郎左門と  
 奸佞の士有り其用ひられ  
 ざるを恨み毛利と謀り  
 鹿之介兵庫の介鮎之介  
 毒酒を以て謀殺す  
 鮎之介ハ毒ヲ計りれ  
 ば知りて海ニ身を  
 投じ後三年  
 して海より出て  
 九郎左門を亡す  
 鹿之介ハ姫め  
 介けられて  
 丹波より有馬



の湯小入り艱難  
 んくをくして遂に  
 京都小身そくく  
 て時を待ちかゝる  
 鹿之介 三日月を信  
 三年の雨を知りたる  
 上月の城ハ九  
 郎左門の手  
 入りのバ義久  
 毛利の橋を廻り  
 富田の城ハ八勝九君  
 助け五月早苗之介ハ都

尾子 七





尼子勝九

五月早苗之介

九郎左三門  
実儉を示し

自殺  
忠臣西  
服か一千代

得  
姫ハ



駈登りける時ハ歳十  
 六年多し此人義久公  
 田植の御らんの時水  
 路を大石の碍有りて百  
 姓困却るすを見て難  
 取りのけられバ大力  
 を感称有りて此名  
 の一人まであバク功有り  
 寺元生死の介ハ敵  
 従ハ重姫  
 急小



中茨之介

横道兵庫之介の妻浮舟  
 舟ハ上月落城より夫と  
 毒殺の計を蓄み入れて泣く室の津の  
 妹浮橋を便より出まゝる九郎左門が家臣  
 田原兵治ハ浮舟を奪ひて妻とせん  
 家徒ヲ命トて捕へんとす浮舟  
 難なる処辻堂の縁の下  
 非人ありて捕手せとら  
 されバ浮舟よろこびて物語りされバこれ浮舟  
 の妹の夫をるを知り非人も兵庫之介を助けて  
 室の津といひける此非人後ち鹿之介と逢て

8

尼子九



兵庫之介がき舟

8  
 尼子ニ従い  
 ちバく軍功  
 を顕りハク  
 たる十勇士の  
 一人なる  
 中茨之介  
 是なり

8

雷光と共ま雷なり  
 火の魂落ちて怪し  
 物荒廻りあるを  
 早介之を捕へられ  
 足利公のついでに  
 是より奴とあり將軍  
 息女白綾姫を勝丸  
 君のゆひ尼子四郎勝  
 久とす山中鹿之介ハ  
 本名を明し尼子の  
 勇士京都不集りて  
 尼子家再興をころ  
 り上月に出陣そ



行の  
 早介ハ鹿の  
 介のをる  
 ありふ  
 両ハ盆を  
 傾

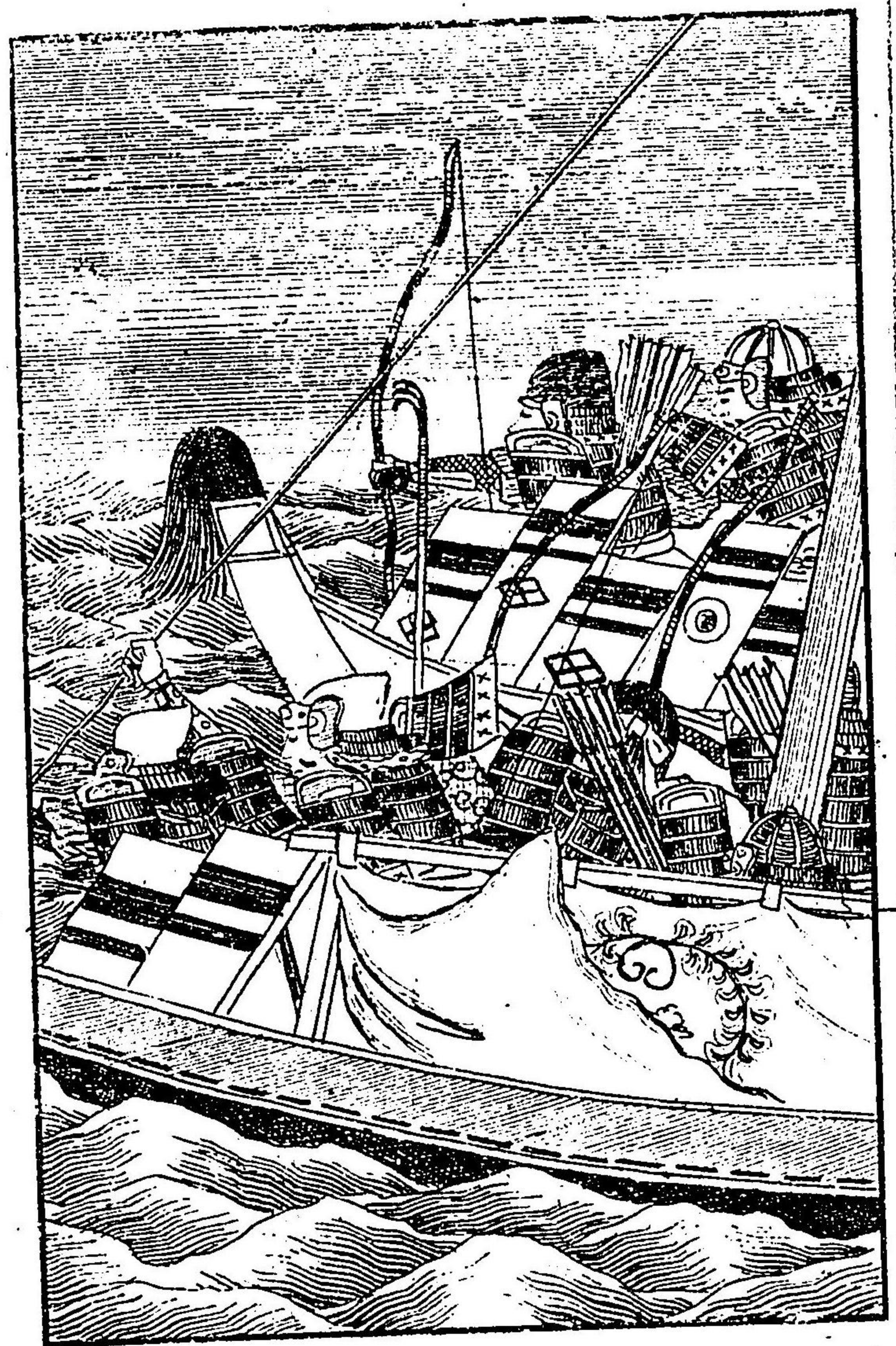


鹿之介ハ毒殺を免れられバ京都中  
 納言の許小来り東福寺にて勝丸  
 公を助け其牙ハ軍人  
 松永 彈正の奴と  
 再興を待まれ  
 將軍ハ  
 銀閣寺  
 におるり  
 松永  
 早介



山中鹿之介ハ幼君尼子四郎  
 勝久を輔佐して海路播州姫路  
 至り上月の城をのつり雲州  
 富田を攻寄られバ尼子九  
 郎左五門城外不出陣し鹿之介  
 を罵りりされバ寺本生死之介味方  
 となりて勝久公の敵きりりと九郎左五門  
 を生捕られ山中の将士敵陣小乱れ  
 いり何の苦もろく富田の城をのり  
 取りける勝久公ハ尼子十男の  
 諸士小賞称し父君を毛利  
 より復して富田を在城  
 せしむ鹿之介以下益々  
 天下は名譽を顯し尼子の家運

尼子  
 十一

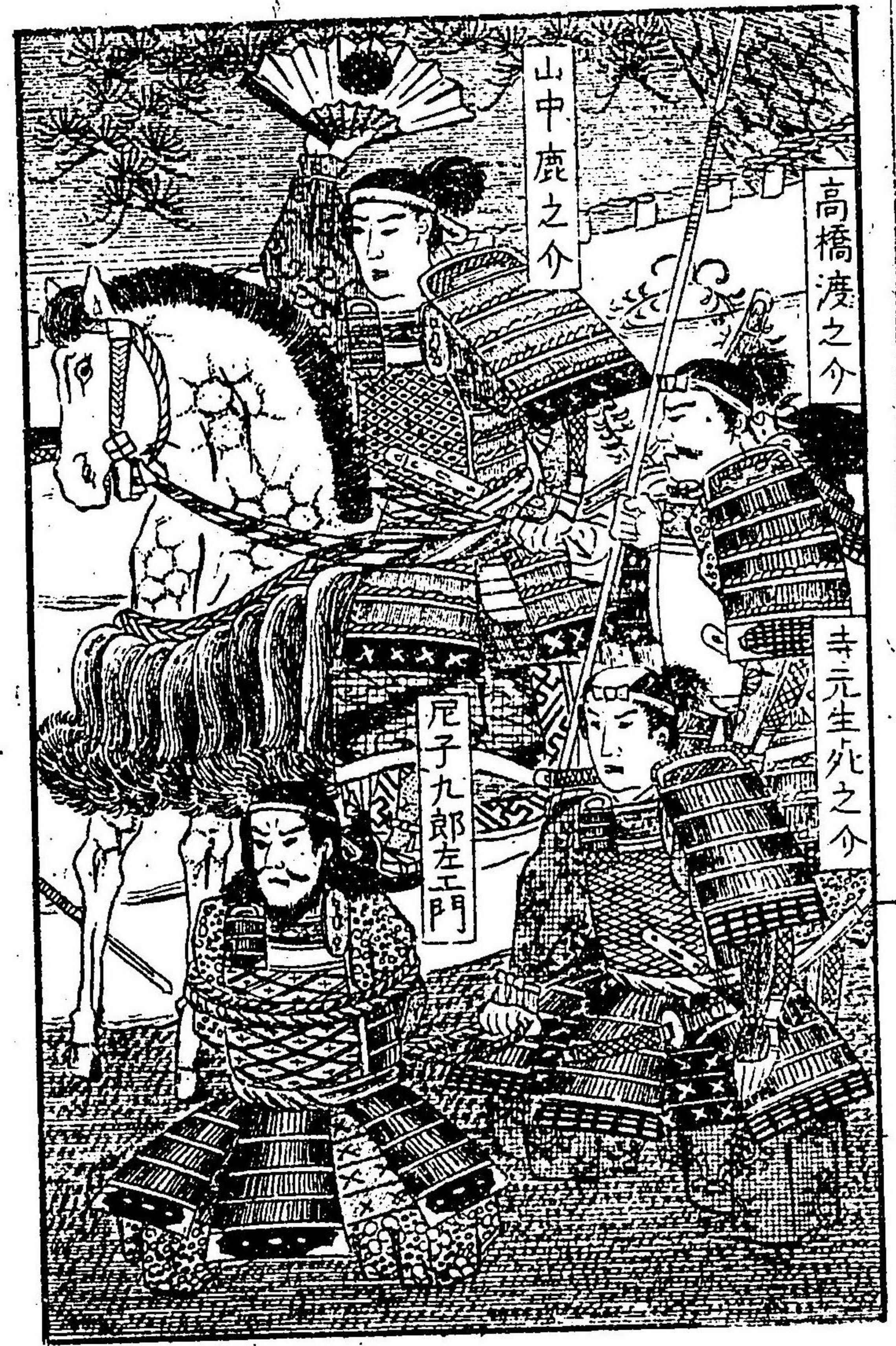




旭の昇るが如く  
將軍家より  
白綾姫を勝  
久公に賜ひ  
武威益々  
盛んなり  
ける又勝久公の身替り  
五月早苗之介  
荒波鏡之介  
横道兵庫之介  
秋宅庵之介

忠臣森脇  
千代丸が墳  
一字の寺院と  
建立りて是を  
森脇寺と号し

尼子 十二



山中鹿之介

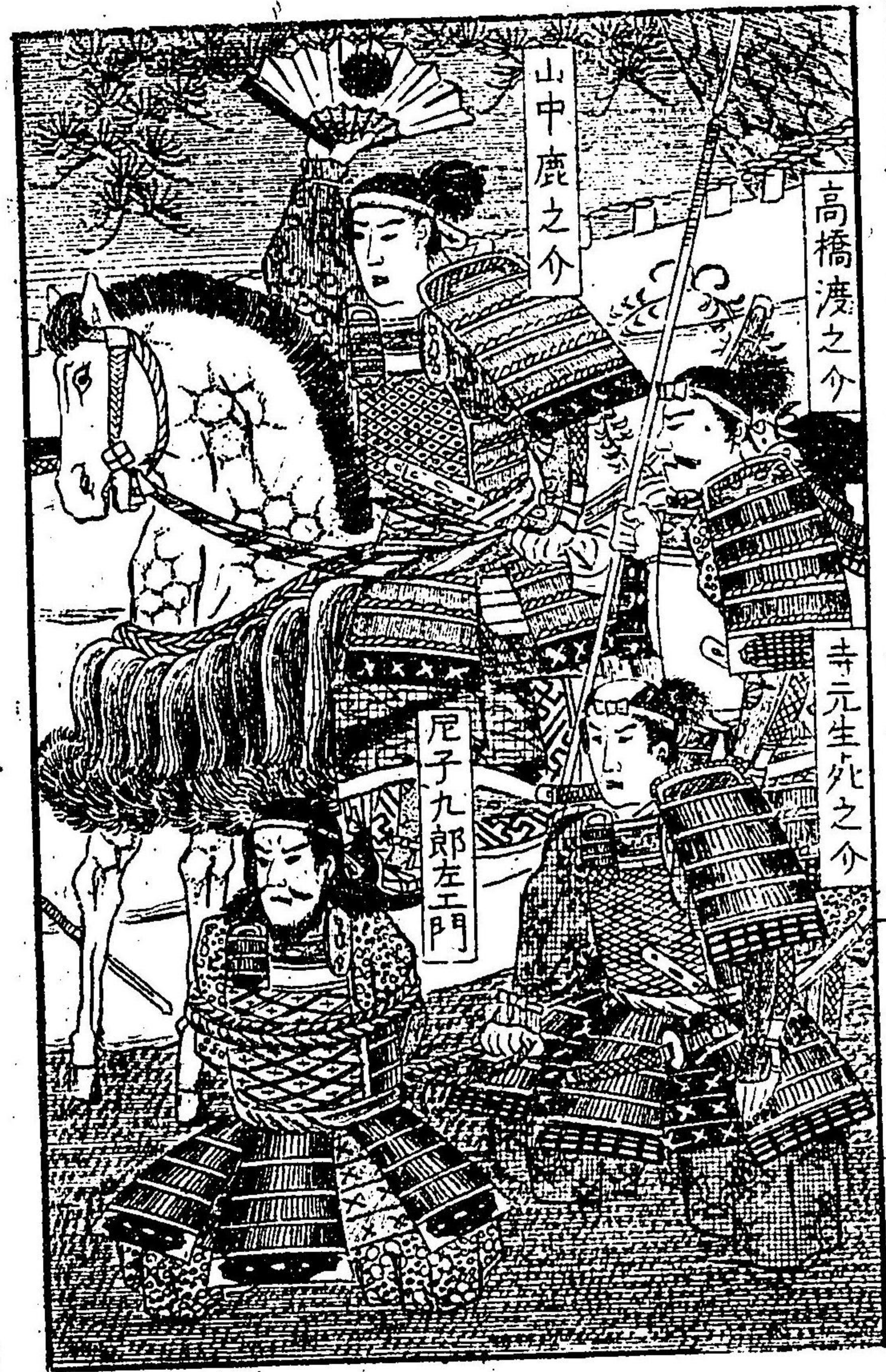
高橋渡之介

寺元生死之介

尼子九郎左門



尼子 十二





將軍息女白綾姫

尾子四郎勝久公



明治廿一年三月十五日御宿  
京都府下京區三越京極町十五番  
著者 兼茶行著 今井七太郎

明治廿一年三月五日印刷成功  
京都府下京區七越茶原町北三番  
印刷者 伊藤伊之助

大賣捌所

寺町茶原北二入  
今井七郎兵衛

